
IS -隊長補佐の憂鬱-

偽桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

I S - 隊長補佐の憂鬱 -

【Zコード】

Z5945Y

【作者名】

偽桜

【あらすじ】

「こんな壊れた僕だけど、まあまあ幸せです」

これは、少し壊れてしまったオリ主「御刻 礼衣」がIS世界に転生し、ドイツ軍でゅらゅら生きていくおはなし。

一夏「……よし、なんかそれっぽくできた」
礼衣・ラウラ「『これ書いたのお前かよ！』」

作者が初心者＆割と文才がないです。

第一話 プロローグ（前書き）

初投稿です。

テストなので若干短いです。

第一話 プロローグ

……………

ガ……………ガ……………ガガ……………

それは心の削れる音？

ガ……………ガ……………ガ……………

それは心の最期の叫び。

ガ……………ガ……………ガ……………

誰かと自分の赤いナースカで染まった体は、もう少しも動かないけれど。

……………ガ……………

ナミダも流せないほど、僕の心は磨り減ってしまったけれど。

それでも、最期に、叫びたい。
それが絶対聞き届けられないとしても。

……イキタイ……

…………

さて、突然で申し訳ないとは思つけれど、僕「御刻 礼衣（みとき
れい）」は転生者だ。

… オーケイ、その「いい精神病院紹介してあげようか？」みたいな
目線にはもうなれているから、怒るなんてことはしない。

でも、実際記憶として頭のなかにあるんだから、仕方無いだらう？

前世で普通の高校生として生き、死ぬ直前学校内で殺し……いや、
あの時の事はもう思い出したくない。

で、死後何か白髪の老人みたいなのが出てきて、テンプレの如くチ
ート能力を貰つてこの世界『IS』インフィニット・ストラトスく
の世界』に来たって訳。

因みに貰つた能力は、サブリ無しで『ヴィーグル』に乗れる能力と

全体的な身体能力強化。何か「役に立つ物なら何でもいい」とか言つたらこうなつた。

…といふか『ヴィーケルエンド』とか、妙にチヨイスが渋い。おかげで生活には苦労しないし。

ま、そういう訳で、今は中学一年生の夏休みである。
せっかくの夏休みなので、僕は株取引で手にいれた某航空会社の株主優待券（配当でもらつた）でドイツへ海外旅行をしている訳だ。
一人で。

… じつは世界での両親には気味悪がられて中学に入学すると同時に独り暮らしさせられたからなあ まあいいけど。

さて、何で僕がこんな現実逃避みたいな自己紹介を誰かに語つくるかと言つと。

「…………えーと

「…………ふえ」

目の前で突然銀髪眼帯少女が泣き出したからである。
いや決して僕が泣かせた訳ではない。
簡単に流れを説明すると、

レストラン探しに路地裏に入る

田の前の少女が暴漢に襲われかけているのを田撃

ヴィーグルを使い暴漢排除

少女に話し掛ける

少女泣き出す イマココー！

……訳解らん。

まあ、何か僕の言葉が何かのトリガーになつたみたいだし、取り敢えず事情を聞こいつとしてみる。

「あの、大丈夫？」

「……大丈夫では……ない……」

お、日本語通じた。

「……また……他の隊員に馬鹿にされる……」

『隊員』って事は、何かの組織にでも入つていいのだろうか。見た感じ小柄だけど『ひみつきめぐつ』とかする年齢ではないっぽいし。

しばらく事情を聴いてみた所、何とこの少女、原作ヒロインのラウラ・ボーデヴィッシュをやんらしき。まあ見たときからそんな予感はしてたけど。

： 実はエス自体は3巻ぐらいまでしか読んでないんだよな、僕。何か有無を言わせすゞの世界に飛ばされたし。

まあ、大体の事情は理解できた。

ちゅうど今は、ラウラさんが田の改造を行つてスランプに陥つた時と織斑 千冬から鍛えなおされる間らしい。

この様子を見る限り酷いイジメを受けているみたいだな。
なんか今の状況も街での隠密行動の訓練中他の隊員に嵌められてこ
うなつたみたいだし。

さて、どうしたもんかねえ…？

ま、どーせ助けるぐらいしか選択肢がないんだけど。

第一話 プロローグ（後書き）

初心者なので文も拙いですがよろしくお願いします。
更新はなるべく早めにする予定です。

：ヒロインとかチート能力とか全部AMIDAクジで決めちゃった
のは秘密。

第一話 僕が軍人になった流れとか（前書き）

急展開すぎた。

…すいませんorz

第一話 僕が軍人になった流れとか

まんなかで

あかい

あるいいけの

あかい

まんなかで

ぼくはわらう

ぼくはわらう

そうしたら

めのまえの**が

あかいみずをふいたよ

「それでは、御刻 礼衣さん。『シユヴァルツエ・ハーゼ』へようこそ。解らないことがあつたら、気軽に私は『クラリッサ・ハルフオーフ』に質問して下さいね」

…え、何がどうなった？

なんていきなり歓迎の言葉を言われるのか流れが全く理解できない。

特に怪しいことではない筈なんだけどな……

|| || || || || || || || || || || ||

自分の身の上を語ったことで少し落ち着いたらしくリカウラと僕は、その後表通りのカフェでケーキを食べていた。

いつも街に出るときは訓練で来ることがほとんどで、あまり外で食べたことのないらしいリカウラは周りをきょろきょろしながらバームクーヘンを頬張っている。

「周囲を警戒しているのは解るけど、ぶつちやけ小動物みたいでかわいい。

「で、リカウラさん

「ムグ…何だ」

何か幸せそうな顔してる。けど、

「あつあつってた」とつて簡単に話してよかつたの?」

「あつ…

やつぱり…

やつぱりこう言うのって、軍の方から拘束とかされるのかな……。
早く終わるといいけど。

ま、その後当然僕はラウラさんの訓練の監視をしていたらしい人に
取り押さえられ、ドイツ軍に身柄を拘束されてしまった訳で。
身体検査・尋問等々を3日間程やらされた。

ちょっと話をした監視の人に聞いてみると最初は「身元が特定でき
たらすぐ解放しますよー」とか言ってたのに、2日目辺りから「す
いませんもう少し検査させて下さい、お願ひですから!」みたいに
態度が変わった。

…と言つた監視の人自体が軍服から軍服+白衣の研究者っぽい人に
替わつてた気が。

で、それらが終わった直後、連れ出されていきなり軍服に着替えさせられた後いきなりさつきの様な事を言われた、と言つ訳だ。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「質問してもいいですか」

「はいはい何でしよう、大体の事なら教えてあげますよ。あ、流石に私のスリーサイズとかはちょっと……」

なに言つてんだこの人。

「いえ、そんなどーでもいい質問ではなくてですね……」

「ジーでもいいとか言われた……」

「あー、しゃがんで地面にのの字書いてる余裕あつたら質問に答えてくれません? こっちもツッコミ入れんの面倒なんで。というか本当になんで只の一般人である僕を部隊に?」

「身体能力・思考能力は遺伝子強化兵並み、しかも体内の分泌物を自由に操れる特殊体内ネットワークが構成されており、更に男性なのにIS適正Aなんてイレギュラーの何処が『一般人』なんですか。そんなこと言う口は塞ぎますよ?」

もうやだこの変態。

しかし、そこまで調べてたのか、ドイツ軍。
多分『体内の分泌物を自由に操れる特殊体内ネットワークが構成』つてのは『ヴィーグル』の副作用だろう。身体能力うんぬんも多分チート関連。しかし、

「IS適正A?」

そう、これは初耳なのだ。
女性にしか扱えないISは、男性には「IS適正：（なし）」を
出すはずである。

そんな質問をする僕に、

「私達だって解らなことありますよー」JRCの方が理由を聞かれたごめんなさいです！」

いやそんなキレられても困ります。

しかし、どうやら僕がE/Sを動かせるのは（少なくとも検査上では）本当に動かせるなら僕をE/S部隊に引き込み、黙々でも特殊部隊あたりに配属させるつもり。といふか、

「あ、御刻さんの日本国籍、消しましたから」

…逃げ場が無くなりました。

要はあれだろ？『ドイツ軍に入らなーいと国籍無くなるよ？』といいたいんだろう。やつきの言葉の所に書いてあった。

まあどうひたすら入るしか無いんだろ？な……

「はいはい、入ればいいんでしょう入れば。ちなみに僕の役職は？」

「あ、役職ではないですかあなたと一緒にいたラウラ・ボーデウェイツヒさんとタッグを組むことは決まりましたよ」

まあ、それは予想していた。

片や『落ちこぼれ』、もう片方は『いきなり飛び込んできたイレギュラー（しかも男性）』である。

タッグにして隔離するのは考え方としては順当だらう。

「と、いう訳で、改めまして『シユヴァルツ・ハーゼ』よつじょ、御刻 礼衣さん」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝

その日の午後。

僕は本当にEHSを動かせるかどうかを試すため、EHSの倉庫に来ていた。

「…えーと

多くのドイツ軍関係者が見当る中、黒いE-15（量産型らしい）。名前
忘れた（）に触れる。

触れた途端流れ出てきたモノは、

あか

あかあかあかあかあかあかあかあかあかあかあかあかあかあ朱あか
あかあかあかあかあかあかあかあかあかあかあかあかあかあかあかあか

「グ...え...アう...」

いやだ厭だ嫌だイヤダいやだ厭だ嫌だイヤダいやだ厭だ
嫌だイヤダいやだ厭だ嫌だイヤダ嫌だイヤダいやだ厭だ
嫌だイヤダいやだ厭だ嫌だイヤダ嫌だイヤダいやだ厭だ

みんなが「なにか」いつているのがおしゃれ

めのまえの朱がある／オチテそこからみどりの根がトンデ青がの
ぼつた

…………やうか、ぼくはけつきょく

* * * * * なんだ。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝ side shift ラウフ

「グ……え……アう……」

ISに触れ、装着された途端、いきなりノートキが苦しみ出したのを見^て、それを見ていた人々は騒ぎ始めた。

しかし、騒ぐだけで誰も近寄る人はいない。

ミトキから発せられる雰囲気が、あまりにも異常狂氣じみていただつたからだ。

眼の焦点は全くあつておらず、息も荒い。

そして、何よりも小声で発せられている言葉があまりにも狂っていた。

不意に、そんなミトキの姿が自分に重なつた。

周りからは奇異の目で見られ、誰も近寄ることのない、その姿が。

そうか、この人も『ヒトリ』なんだな、と。

そう、思つてしまつた。

なら、助けてあげなければ。

だから、周りの皆は助けようとはしない。私にそうした様に。

だから、これは偽善。

自分が彼を助けたら彼も自分のことを助けてくれるかもしれないといつ、そんな思考の結果。

そう自分に言い聞かせ、私は一歩を踏み出した。

=====break shift

壊れかけた自分の思考を引き戻したのは、小さな温かさだった。

その原因を探そうと目線を下に送ると、僕のことを抱きしめてくれる小さなラウフとの姿。

抱きしめ方は、まるで壊れ物を扱つよう。

不意に、自分がラウラさんを助けた時のこと思い出した。

4人ぐらいの暴漢に立ちむかおうとしていたその姿は、どこか諦めたような眼をしていた。

『どうせ助けは来ない』と。

結局、僕がラウラさんを助けたのは、ただの自己満足とか同情みたいなものだったのかもしれない。

でも、今度は僕がラウラさんに助けられた。

こんな狂ったような僕を。

そのとき、僕はこの世界で初めて、心から温かいという感覚を実感できた。

第一話 僕が軍人になった流れとか（後書き）

感想・意見等お待ちしております。

第三話 入隊初日（前書き）

今更になつて一話の前書きに誤字を見つけるという致命的なミス。r z

相変わらず微妙な文章です。

第三話 入隊初日

~~~~~

「なあ」

「ん？」

「来週授業参観だよな」

「せうだね」

「面倒くせえよな、高校一年生にもなつて何を親に見せるんだよ。  
どうにかなんいかね」

「今回で最後になるよ」

「はっ、高校一年生でもやる筈だろっ！」

「いいから、来週を楽しみに待てばいいこと黙つよ」

?????まだ何も終わっていない時の一幕

……………

僕がI-Sを暴走させかけた事件から、一週間経った。

事件後一応行つた動作テストではI-Sを動かせたはいいものの、ドイツとしても僕としてもあのよつた事を毎回起こされたのではたまつたものではないので、もう一度一週間かけて身体中を検査させられ、精神鑑定等々も受けた。

しかし、結果は『全く異常なし』。

原因が解らないのではどうしようもないのに、結果あの時に僕を救ってくれたラウラさんが僕の監視役兼バディとして就くことが確定しただけになつたらしい。ちなみに僕はラウラさんの補佐兼バディ。

そんなこんなで、実は今日がシュヴァルツェ・ハーゼでの初仕事だつたりもする。ついでに今日から軍の宿舎へ正式に住むことになった。日本からの荷物の移動は全部やつてくれたみたいで、とても有難い。今日は訓練だけらしいので、『初仕事』といつてもそこまで感慨があるわけではない。検査終わつてからずっと自主トレしてたし。

……………一度、暇だったのでヴィークル使って自衛トラップだらけの軍施設の屋上飛び回った時はかなり驚かれたな……あれやつた後

ラウラは『あがが入隊したての元民間人の動きだと?』じゃあ私はなんだ!』とか軽く落ち込んでたし。研究者の人たちも『あのセキュリティ網を突破しただと?それが私たちの限界だと言つか!』とか頭を抱えてた。

あ、ちなみに『現時点で世界唯一の男性IDS操縦者の監視役』という大役を任せられたラウラは、周囲からも一目置かれる、というか手を出しにくい状態になり、イジメはなくなつたらしい。「次は実力でも他の奴らを見返してやる」って気合を入れていた。その様子がかわいかつたので、つい撫でてしまつたら赤面して殴ってきた。まあ避けたけど。

そんな日の朝、ラウラさんと僕が朝食を食べていると。

「なあ」

「何、ラウラさん?」

「その『さん』付けは止めてくれないか?一応、今日から正式に私とお前はタッグを組むわけだからな」

「そうするのは別に構わないけど、ならその『お前』呼ばわりもやめてくれないかな、ラウラ」

「ふむ、別に良いだろ？。ミーティ」

「あー、名字で呼ぶのはなるべくならやめてほしいんだけど……」

こっちの世界での両親の事を思い出すから。あの入達が最後に向けてきた目線は、紛れもなく『バケモノ』を見る目だった。そんなもの、誰も思い出したいとは思わないだろう。

「解った、レイ」

そんな僕の心境を察してくれたのか、ラウラは特に文句も言わず了承してくれた。

あの事件があつてから、すゞぐ、といえる訳でもないがラウラの僕に対する態度は他の人にに対するそれよりも柔らかくなっていた。僕としても気軽に話しかけられるのはラウラだけなので、かなり有り難かつたりもする。

「そついえばさ、ラウラ

「なんだ？」

「今日の訓練内容って何なの？」

「簡単な基礎体力訓練だけだ、多分な。」

ついでに僕の紹介もする、とのこと。

隊員は全員女性らしい。まあJS部隊なら当然だが

……『ウラも居るし、心が折れるような事もないだろう、たぶん。

＝＝＝＝＝

ついに来たよ、シュヴァルツェ・ハーゼでの自己紹介タイムが。  
今やつと原作主人公の気持ちが解つた気がしないでもない。

おかしいな、なんで女子が10人程度の前に居るだけなのにこんな  
冷や汗が出るんだろう。

皆さん妙に目が怖いんですけど。『獲物を見る捕食者（性的な意味  
d……ゲフンゲフン）』みたいな。

「えーと、今日からシュヴァルツェ・ハーゼに隊員が一人増えまし

た。彼は『世界唯一の男性INS操縦者』ですが、このことは機密事項に指定されます。表向きの役職は『ラウラ・ボーデウィッヒ隊員の専属機体整備担当兼アドバイザー』となつてますので、その辺りの詳しい事情等は後でファイルを渡すので良く読んでおいて下さい。

……あ、ちなみに彼の詳細プロフィールが入っている当たりのファイルが一つだけ紛れ込んでる

「何でそんな変なことするんですかクラリッサさん…？」てかそのプロフィールに情報どこから持つてきたんですか！？後輩さん急に目つきを光らせないで！怖いからそれホントに怖いからー！」

急に雰囲気を変え僕のプロフィールが書いていると思われる紙を取り出そうとするクラリッサさん（何と驚いたことにシュヴァルツェ・ハーゼの隊長らしい。性格に問題がありすぎる気がする）を全力で止める。

何かとっても先行きが不安なんだけど……

「冗談です」

本当か？それにしても目がマジだつた気がするんだけど。

「では、御刻 礼衣さん。自己紹介をお願いします」

この雰囲気で自己紹介かい。余計やりにくくなつたよ。  
まあ仕方ないか。

「御刻 礼衣です。さつき『世界唯一の男性IJS操縦者』とか凄そ  
うな紹介をされましたか、偶然そんな特性が見つかっただけの一般  
人ですので、特にそこら辺は気にしなくていいですよ」

「一般人は普通軍施設の屋上を生身で飛び回れるのか…………？」

……「おいらウラ。僕を孤立させたいのかい？」

ほら皆さん「はあ？」とか「そんな身体能力私たちでも持つていな  
いわよ…………？」とかドン引きしているし。

まあ、当然その後の訓練では僕の周りにラウラカクラリッサさん以  
外の人は居なかつた訳で。

……転校デビューならぬ軍隊デビュー、失敗した氣がするなあ  
……。

＝＝＝＝＝＝＝

そんな悲しい訓練終了後。

僕はクラコツサさんに呼び出しが受けていた。

「何の要件でしょ、うか

一応敬語を使った方がいいらしいのでそれから。

「宿舎の部屋が決まったのと、明日研究所の方でまた検査があります」

え、まだ検査するの？もつ調べられる所なんて無いと思つただけど。

「専用機のための適性調査をするのです。一日で終わるらしいの  
でそんなに緊張しなくても大丈夫ですよ」

ああ、そういうことが。

やっぱりデータ取りのためには専用機は不可欠だしね、どうせな  
ら軍の『切り札』にしたいんだろう。

「わづこづことなのでもちゃんと忘れないよう来てください。後、  
これが部屋の番号と認証用の身分証です。部屋番号は覚えたうぐ  
に破棄して下さい。これで連絡事項は以上です」

要は自分で行け、と嘆息したのだろう。

仕方なく宿舎の指定された部屋の前に行くと、そこには何故か先客が居た。

「あれ、ラウラ？」

「ああ、レイか……」

あれ、何か落ち込んでる。

「何でそんな調子悪そうなの？」

聞いてみると、

「とりあえずこれを見る……」

と、部屋の扉に貼られた紙を見せてきた。

そこには、

『53号室 御刻 礼衣

ラウラ・ボーテウイッヒ

「んやは おたのしみ でしうね b サクラリ

ツサ

クラリッサああああああああああん！――――――――――――

## 第三話 入隊初日（後書き）

クラリツサさん変態淑文化。

感想・意見等々待つてます。

## 第四話 朝はあつやつないじる（ねーむ）（前書き）

戦闘シーンまであと少し。  
ひとつヒュイーグル使いもくれる。

あと8000アクセスと1500ヒューク突破しました。下手な文  
ですが読んで頂き、本当にありがとうございます。

## 第四話 朝にあつそつむじる（ねーょ）

…………

「本当にいるのかい？」

「うん、そのつもりだけど」

「『\*られる前に\*る』なんて愚鈍で理想的な方法、君はやらないと予想していたんだけどな」

「それだけ追い詰められるつてことか。失望した？」

「まさか。むしろ興味をそそられるよ。これだから人間は面白い」

「君も『一応』人間でしょ？何いつてるんだか」

「何百回も『転生』してると、どうしようもなく暇になる物だよ。終いには僕みたいな『人外観察者』になるのがオチだ。」

『そんなものなのかな』

『そんなものぞ、<sup>假漬し</sup><sup>イレギュラー</sup>転生者なんて』

僕と彼との下らない遊戯の会話

~~~~~

=====
= side shift · ラウラ

部屋の前に貼つてあつた張り紙についてはレイと一人で見なかつた事にして、もう遅いのでとつと寝よう、といつ話になつたのだが。

「ラウラ」

「何だ」

「なんで裸なの?僕の精神衛生上せめて前は隠して欲しいんだけど

「だが断る」

何でレイの精神衛生に悪いのかが理解できません。

「あー、やっぱりでもここや。おやすみ」

む、流石に『どうでもいい扱い』されるのは心外だぞ。

反論しそうも無いレイは寝てしまったようなので、仕方無く私も寝ることにする。

- - - - -
布団の中で考えていたのだが、私はレイに少し少し思い違いをしていたのかもしない。

ところの、ここ一週間で気がついたのだが、レイが私を見る視線は同類を見るような同情の目だけではなく、どこか『私にあってレイのは喪われてしまったナニカ』を羨み、私のそれを守ろうとする決意みたいなものが見え隠れしていた。

その『ナニカ』の正体だが、私の知る限りではレイの事を遠ざけた両親に関してぐらうしか思い浮かばない。しかし、私はそもそも両親がいないし、その事に関しては隠す必要もないのにレイには前に話してある。よって違う。

…… そういえば、私が試験管ベビーであると言ったとき、レイは蔑む事なんてせずに『ラウラさんほラウラさんなんだから特に気にならないよ』と呟いてくれた。ちょっと嬉しかった気もす・・・げふんげふん。

まあ、その『ナニカ』の正体は全く解らないが、『レイの心の闇は私よりももつと深い』という事だけは感じ取れた。

その上で私に気を遣つてくれているのだから、レイには感謝してもしきれない。

……私が、少しでもレイの心を癒せるのなら、してやりんとな。

====break shift

朝が來た。

『ヴィーグル』を使えば意識のオンオフは割と容易なため、起きた直後でも頭ははっきりしている。

「……あれ」

ふと隣のベッドを見ると、リカラはもう居ない。

もう朝食を食べに行つてしまつたのだらうが、と思い、自分も急いで準備しようと布団から起き上がる。

「なんでもいいことあるのセー?」

「ふあ……?」

僕の布団の中にラウラが居ました。

しかも寝る前と同じ格好、つまり全裸で。

自分の顔が赤面していくのが解るので、『ヴィーケル』に乗つて急いで心拍数を調整。

急いで『足』と『手』を『動かし』、急いでベッドの上から降りたところで『身体』を『捻り』ラウラの方向へ向ける。これで一安心だと思ったら、

「あ、れいだ~」

ラウラが素早い動きで抱きついてきた。

何とかして抜け出そうとするが、全く身動きがとれない。

どうすればいいのか迷つてると、

ガチャ。

「礼衣さん、そろそろ検査ですので急いだ方が…………あ

あ。

「おひと失礼しました。それでは」「おひくつへ

バタン。

「クラリッサあああん！誤解ですつてええええええええ！」

一一一一一一

「すまなかつた」

朝食を食べに食堂へ歩く最中、やっと頭が起きたらしこうカウント謝つてきた。

「いや寝ぼけただけだらうし別に気にしてないけどさ、なんで僕の布団に入つてたの？」

「それが解らんのだ」

「二つめは解りないといつていいのか。まさか寝ぼけたとか言わないよね?」

「レイが私を自分のベッドに連れ込んだのでは無ければ、寝ぼけたぐらいしか可能性が無いのだが」

「マジですか

まあいいナビ。

「そういえば、レイも今日適正検査なんだろう？」

「うん、そうだけど・・・ってレイ』も『って事は、ラウラも検査するの?」

といふかまだ専用機無かったのか。

「そのようだ、仮にもレイは私の専属機体整備担当と云ふことになつてゐるからな。専用機がないと怪しまれる」

ああ、そういうことか。

その後も他愛のない雑談を一人でしながら朝食を取り、施設内のI-S専門研究所に一緒に行つた。

……なんかその様子を見た一部から「新入りの御刻 礼衣隊員

とラウラ・ボーデウイッヒ隊員が恋仲である「なんて噂が流れ始めたらしい。余り悪い気はしないけど……げふんげふん。

そんなこんなで検査会場。

僕もラウラも身体検査等々は終わっているので、何を検査するのかと話を聞いたところ。

「あ、戦闘傾向のデータ取るからとりあえず一人でテスト専用機使つて戦つてみて」

……………はあ？

第四話 朝はあつやつなーる（ねーる）（後書き）

戦闘まで行けなかつた・・・・。おーん
ヴィーサーの機能つてあんな感じで良かつたんでしたつけ?
感想等々お待ちします。
後、もしかしたら明日とこまでは投稿できなにかもせません。
詳しきは活動報告にて。

第五話 模擬戦前（前書き）

戦闘入れなかつたorz
焦つて書いてしまつた。

第五話 模擬戦前

…………

「ねえ」

「何だい？」

「君は何故いつもここにいるの？学校は？」

「転生する度何回も同じ内容の授業を受けるのは苦痛だと思わないかい？それなら外で暇を潰した方がよっぽど有意義だ」

「そんなものなのかな」

「そんなものだよ、ボクの人生なんて。君も転生すれば解ると思つづ？」

「いや、遠慮しとくよ。何か大変そうだし」

「それは残念」

僕と彼とのいくつかの会話

…………

「では、模擬戦のルールを説明します」

ろくに文句も言えないまま、ラウラと模擬戦をする事になってしまつた。まあデータを取つていないものといえばこれぐらいしかないので、仕方ないのだが。

「シールドエネルギーの初期値は両者共に600、武装は適当に詰め込……格納領域に様々な種類のものが入つてるので、自分で自由に」

「今絶対に『適当に詰め込んだ』って言いかけましたよねえ！？」

「氣のせいです」

嘘だ。

「氣のせいだわ！」

え、ラウラには聞こえてなかつたの？もしかして幻聴だつたのか？

「あとデータの収集がメインですので、なるべく激しい戦闘は控えてください。質問はありますか？」

「「いえ」」

ラウラとハモつた。割と嬉しい。

＝＝＝＝＝＝＝

そんなわけで模擬戦である。今現在、僕は知らないうちに用意されていた僕専用のIJS-スースを着て、ドイツ軍がチューンしたラファール（なんか全体的に色が黒い以外は見た目に違いがない）を装備している。

そして目の前には今日の模擬戦の対戦相手であるラウラが、緊張した面持ちで同じ型のラファールに身を包んでいる。

「それでは、40秒後にブザーが鳴つたら戦闘を開始してください」

オープンチャンネルでのアナウンスが入つたので、僕も『ヴィークル』に乗り、戦闘準備を整えることにした。

ちなみに僕の『ヴィークル』の操縦席は、いつもは初代ガダムのコックピットみたいな感じである。しかし、ISに乗った時はアシックスみたいな全天周リニアシートみたいな形状に変化する。どうやら『ヴィークル』側でISのシステム関連をうまくシームレス化しているらしく、ハイパー・センサー内で認識している範囲もちゃんと可視化してくれるみたいだ。

ほかにも、『武装一覧』を呼び出してそのまま武器をコールしたり、シールドエネルギーや各武器の残弾数、ISの損傷箇所・損傷レベル等も『ヴィークル』から簡単に確認できる。

悪くなつた点と言えば、IS側の生体補助機能のせいで一部の体内物質の分泌量が全く調整できなくなつてしまつた事ぐらいだろう。

以上前の動作テストで確認したこと終わり。

『ヴィークル』の展開が終わり次第速攻で『条件反射』のパネルを開く。

生体時計と照らし合せながら、ちょうど試合開始と同時に次第『マシンガン』をコールして、右に移動しつつ『目標ラウラ』にオートで照準を合わせ発砲できるようにプログラムする。

プログラミングが終りし、開始まであと15・1925秒となつたとき、ラウラの方から通信が来た。

「レイ

さすがに返答しないのままそこで『嘘』を発する。

「なに、ワケアリ?」

開始まであと7秒。

「本氣で行く」

あと4秒。

「奇遇だね、僕も同じことを思っていたよ」

2秒。

1。

「「それでは、始めよ!」(か)」「

戦闘が、始まつた

第五話 模擬戦前（後書き）

感想お待ちしています。

追記

誤字見つけた。修正しました。

第六話 模擬戦（前書き）

やつと戦闘入りました。
かなりテンポ悪いです。

第六話 模擬戦

|||||

『平和は犠牲の上に成り立つてゐる』といふ言葉は、皆さんも時々耳にする事があるだろう。

無論、日本人のほとんどは『平和』の側に生活している。

さて、その『平和』の中で生きている人の中で、見ず知らずの『犠牲』側の人間をいつも気にして生きている人はどれ程いるだろうか。

……恐らくは極少数しかいないだろう。自分の身の回りにそんな人間がいたら、まず偽善者^{嘘つき}だと思っていい。本来そんな事をしていたら、直ぐに精神が狂ってしまう。

その点で彼は非常に不幸だ。なにせ嫌が心にもその存在を知覚しなければいけない所に、自分の平和の下にいる『犠牲』がいたのだから。

……さて、彼はどんな選択をするのか。自分の立場上干渉しないのがもどかしいが、これから非常に楽しくなるだろう。

ある人物の日記から

|||||

戦闘開始と同時に、さつき組んだ『条件反射』が作動。大きく右に移動しながら、ラウラに向けマシンガンを乱射。だが流石に向こうも訓練を受けた軍人である。一瞬こちらの攻撃の早さに驚いたようだが、直ぐに持ち直し被弾を最小限に抑える。そして直ぐにマシンガンで応戦。

少し被弾しながらも回避したのだが、ここで大きな問題が発生した。

「（思考加速も使えないのか、まずいな…………）」

『ヴィーサル』の機能である、思考の高速化が出来ないのだ。多分ISの生体補助機能辺りと干渉したのか、全く稼働しない。

当然それがなくても動く事はできるのだが、さらに悪いことにISと『ヴィーサル』の間に僅かな反応の遅延があるせいで、動作のコントロールが難しい。

そのせいで回避した後も更に被弾してしまい、シールドエネルギーがじわじわ削れしていく。

仕方ないので『ヴィーサル』でラウラの武器の向きから弾道を予測、可視化してそれを頼りに回避、攻撃を繰り返す。

しかし、それでもすべて避けきれない。

何か策はないかと『武装一覧』を呼び出すと、一つの案が思い浮かんだ。

直ぐに右手にスナイパーライフル、左手にブレードをホールド。

「レイ、ふざけているのか？」

「『ルハ』でもしないと勝てないと思つて、ね……！」

「なつー！？」

ブレードを前方に突きだしながら加速。

流石にこんな単純な攻撃をすると思つていなかつたのか、ラウラは焦つてブレードを呼び出し応戦しようとする。しかし、

「甘いよ」

ラウラがブレードを構えるのを確認し次第、僕は右手のスナイパー・ライフルを構え、目標ラウラに発砲。ラウラのシールドを削っていく。

「不意討ちとは、やつてくれるな…………」

そう言つたラウラが構えたのは、大型の荷電粒子砲。おにじっちはん

はそんなの入つてなかつたぞ。

とは言えあれに当たるのは不味いので、射線予測で急いで回避。

しかし、その先にいたのは。

「ラウラーー？」

「セツキの甘いこといつ葉、そのまま返をせてもひつ

いつの間にか移動し、ブレードを構えたラウラだった。急いで回避しようにも、EISの反応が遅いせいで移動できない。
仕方ないので左手のブレードで受け止めるが、押しきりられそうになる。

急いで右手のスナイパーライフルを構え、照準を適当に合わせ発射。

当てることはできなかつたが、体を離すことには成功したので、急いで体勢を整える。

「よくかわしたな、レイ。それが本当にい最近まで民間人だつた奴の動きか？」

「警めてくれてるのかな、それは」

「やうだが？」

「それは嬉しいな、だけど

」

「「容赦はしない」」

二人の言葉が重なると同時に、僕はラウラに向かって突っ込み

「あ、データ採れたんでもういいですよ～」

ガタン。

「「はあ…………？」」

研究者^{バカ}の介入によってIRSが停止したせいで、唐突に試合は終わってしまった。

＝＝＝＝＝＝＝

そんな戦闘終了後、まず一人でやつた事は研究者をぶつ飛ばす事だつた。

そいつは「すいませんほんの出来心だったんですね〜るしてくださぎ
イアアアアア」何て断末魔あげていたが、そんなもの僕らの知つたことではない。真剣な戦いを邪魔した罪は重いのだ。

その後、ほかの研究者に個人的な要望（反応の遅さとか思考加速の事とか）を伝え、「ラウラと一緒に宿舎に帰る」とことした。

「ラウラ」

「何だ」

「さつきの勝負、いつか決着つけよつ」

「そりだな、私もあんな結末では納得できません」

そう言つて笑つラウラ。かわいい。

なでなで。

「ふにゃつー？……………な、撫でるなあー」

「あはは」

顔を真っ赤にして殴つて來たので、僕はラウラに捕まらない程度にゆっくり逃げることにした。

……一方、その様子を見た他の人々は。
「なにこの甘い雰囲気」と思つたそつな。

＝＝＝＝＝ side shift：ドイツ軍研究者のみなさん

「あの男性操縦の方からHSの反応が遅いと苦情が来た」

「何？あの実験機は専用機並みに反応が速いはずだが」「

「な、う、う、うすればいいんですか！？」

「仕方ないが、『アレ』を使つしかないか……（使いたいだけ）」

「『アレ』をやるとか、本気ですか？」

「なるべくなら避けたかったが、まあ仕方ない……（ほんとはすげーヤル気）。バチシステムは開発放棄だ。あんなものをダラダラ作り続けるよりも、急いで『アレ』を完成させるぞ！」

「…………解です！」

彼らがVTSシステムの開発を全力でスルーしてまで開発しようとしたもの、それは

AMS (Allegory Manipula
t e System) である。

第六話 模擬戦（後書き）

弟から「ACFAネタ入れよしづぜ」という毒電波を受信したのでAMS搭載フラグを建てました。でもこれ以上ACFAネタを入れすぎるのはやめます。多分しつこくなるので。

ついでにVTSシステムがどうか逝ってしまった気がするナゾ気にしてません。

……ヴィークルとAMSってかなり相性がいい気がする。

追記：一応用語解説（ravenwood.jp様より転載、一部
改変）

Allegory Manipulate System 【略称
: AMS

脳と機械の制御装置を接続し、操作を思考によつて行つという次世代型アーマード・コア（ネクスト）の制御方式。
機械と行つ電気信号でのやり取りを正確に処理できなければならず、使いこなすには先天的な才能（AMS適正）を必要とする。
接続者の適性が低い場合は非常に大きな負荷がかかり、脳や神経を損傷する可能性がある。元々は身体的欠損を補うための医療技術として研究されていたが、このために民生化できなかつた。
その操作速度、精密性から次世代型アーマード・コア（ネクスト）の操縦方式として採用される。

この方式でない場合、ネクストの操縦には完全に連携できる数十人のチームが必要になるらしい。

稼動部分を簡略化したりすることで負荷は低くなるようである。逆に精密すぎたり稼働部位が多い装置ほど高いAMS適正を要求されるらしい。

ちなみに本作では、「AMS適正自体は必要ないが、AMS関連のシステムを構築するときには個人にあわせ一つ一つ作る必要がある」という設定にします。

閑話『彼と僕の出会い』と、彼の興味対象が僕になつたワケ（前書き）

今日は部活で出で立つてるのでテストもかねて予約投稿。
今回はいつも本編の上に書いてるアレの少し長めバージョンです。

『闇話』『彼と僕の出会い』と、彼の興味対象が僕になつたワケ

＝＝＝＝＝ shift : dream

これは、僕がまだ狂う前のおはなし。

彼と初めて出会つたのは、高校の入学式があつた帰り道、公園での事だった。

その頃の僕は『あの事』を理解してしまつたせいでかなりショックを受けていた。

ただでさえ荒んだ視界の中、公園の彼に気がついたのは、全くの偶然だろう。

なにせ彼はただでさえ目立つ筈の銀髪で、更に公園の広場のど真ん中に立つていたにも関わらず、全くと言つていいほど存在感が無かつたのだから。

そんな彼にぎょっとして立ち止くとして立ちはぐしていると、彼がこちらに気が付いたのか、ゆっくりとこちらに歩いてきた。

一瞬逃げようとも思つたが、別に逃げる必要性を感じなかつたのでそのまま立ち止まる事にした。

彼は僕の皿の前に立つと、

「いやはや、まさか気付かれるとはね」

と言ひながら笑つた。

「上手く気配を消そうとしたのだけれど」

「なぜ気配を消そうとしたの？」

「なに、ほんの醉狂や。やうした方が僕の趣味がやり易いからね」

「趣味つて？」

「世界の観察。長く生きてみると、そのぐらいしか楽しく思える趣味が無くなるものでね。まあもともと、これもあまり樂しことは思えないナゾ」

「『長く生きてゐる』といつて、君は若さを離れてナビへ典型的な中二病かい？」

「中一病とは失礼な。僕は転生者なんだよ」

「はいはい中一病！」

……そりは言つたものの、その後の話を聞いているとそりは思えなくなってきた。

空想の出来事にしては、あまりにも内容が細かすぎる。

結局、

「解つた、信じるよ」

と言わざるを得なくなるまで。

僕が彼に降参した後、彼は

「さて、君の話を聞かせてくれないかい？」

と話を振つてきた。曰く、

「他人の話は、僕にとって最高の暇つぶしだからね」

らしい。

一瞬話そうか迷つたが、さつきの彼の話が本当なら彼に逆らつても

どうしようもないの、僕の話をすることがあります。

＝＝＝＝＝

僕の話を聞いた後、彼は

「興味深いね、君の人生は」

と一言だけ感想（？）を言った。

「久々に面白い事を聞いたよ。ありがとう」

「僕の人生はそんな扱いか……」

まあいいけど。

「明日もここに来てくれないかい？その話の続きをみたい」

「えー……」

流石にそれは嫌だ。こっちの精神が持たない。

「僕なら君を救えると思つたけど？」

「なんでそんなことを？」

「なに、暇つぶしを」

そんな事を彼は言ったが、一いちじょではなんでもいいからすがりたい気持ちではある。

本当に彼が転生者なら、人生経験も豊富だろう。

「なら解った、明日もここに来るよ

それが、彼と僕の始まりだった?????????

=====dreamend

「起きる、レイ」

「ああ、ごめん少し寝てた」

少しうつた寝していたら、心配そうな顔をしたラウラに起された。

「どうした？寝ながら泣いていたぞ？」

多分『まだ普通だった頃』の夢を見たからだらうが、僕は寝ている間に泣いていたみたいだ。

……思えば、あの頃は確かに辛かつたし、幸せだったとは言い難いけど、まだ楽しかった。

そしてその日々を経ても、もう戻らないのは解っている。

でも、

「ねえリカワラ」

「何だ？」

「」こんな壊れた僕でも、幸せに生きてこけるのかな

「当然だろ？？レイはレイだ。自分の幸せを見つめられる筈だ。
…まあ、何処かの本の受け売りだが」

「ありがとう。それでもすく嬉しいよ」

????????少しごらうござつたら、甘えてもよいよ。

闇話『彼と僕の出会い』、彼の興味対象が僕になつたワケ（後書き）

ちなみに作者はこれが投稿される頃に山頂にいます。

感想等お待ちしております。

第七話 越界の壁とAMS

(ドライシ軍変態研究者の本気) (前書き)

投稿遅れた――――――

相変わらずの駄文ですが、皆さんからのアドバイスで少しはマシになつてくるかなーと思つていていたり。

本当にありがとうございます。

第七話 越界の瞳とAMS（ドイツ軍変態研究者の本氣）

……………

彼の人生の話は僕の暇を潰すには十分だった。
いや、本当に興味深いのは彼自身かもしない。

なにせ、彼は自分の下にある『犠牲』に気が付いた上、その『犠牲』
に無理矢理にでも手をさしのべようとしているのにも関わらず、自
己の精神を非常に危ないところではあるが安定させつつある。

……………その『犠牲』が本当に救いを求めているかなんて全く気
にせず。

さて、彼がそのことに気がつき、心の安定が崩れたとき、彼はどん
な行動をするかな？

非常に楽しみだ。

ある人物の日記より抜粋

「一夏、何をやつていい?」

「おひと誰かと思つたら姉さんか。驚いたよ

「さつきから後ろにいたんだがな。で、何をしていた?」

「いや、ただの中二病小説を書いていただけさ

「おまえは何をやつているんだ……。まあいい、風呂が沸いたので先に入つているが」

「はいはい

「ふう。危うくバレる所だつたよ。まさか『前世で見た面白いものについて色々と纏めてた』なんて言えないからね。さて、『彼』は今どんな様子かな……?」

~~~~~

中途半端に終わつてしまつた模擬戦から一週間後。

僕らには特に何事もなく、クラリッサさんにからかわれながら一人で訓練を続けていた。

ラウラは頑張つて訓練をしていたおかげで、部隊内の成績ランクでは一番下から上位3分の1に入るまでになつていた。

ちなみにラウラが僕の布団に入ってきたのは最初のあの日だけで、翌日からはちゃんと別の布団で寝ていた。あいかわらず全裸ではあつたが。

……僕？相変わらず孤立してますよ？  
ちょっと訓練中張り切って本氣出したりすると毎回ドン引きされま  
すから。

そんな日が続いたの朝のこと。

僕とラウラは、

「…………状況説明ぶりーず」

「面倒なのでイヤです」

起きたら何故かドイツ軍の研究部門に拘束されていた。

「いやいや明らかにおかしいでしょこれ。何で僕もラウラも何か手  
術台みたいなのに縛られて乗っけられてるんですか？」

「面倒なので以下略」

未だ寝ているラウラが羨ましい。一体どんな状況か誰か説明してくれ  
よ…………

「リーダーである私が説明しそうー！」

「何か変なキターーー！」

いきなり白いマントとサングラス掛けて格好つけてる良く解らない  
女性（多分研究グループのリーダーらしい）が現れた。何で貴女そ

んなノリノリで登場したのとか何時からスタンバイしていたとかいろいろと聞く事はあるが、今の所説明してくれそうなのは彼女一人なので黙つて話を聞くことにする。

…………他の研究者の方々が『ああまたか』みたいなすっげー疲れきった顔してる。お疲れ様です。

「突然だが、君達には手術を受けでもうひー。」

「本当に突然ですね」

とこうかテンションが高過ぎです、ラウラが起きるでしょうが。

「Jのテンションが素だ、よつて下げる気もない!しかもボーデヴィッヒには事前に事情説明をした上で麻酔で眠らせてあるだけだ!」

「ならいいです」

なんか心読まれた事には突つ込まない。話が進まないし。

「さて肝心の魔改……手術の事だが」

「今絶対に魔改造つて言いかけましたよね」

まあいいけど。

「まあ簡潔に言つと、君達の専用機のために必要なんだ」

「へー」

搭乗者に手術が必要なヒツでどんなだよ。

「君は模擬戦の時、『反応が遅い』といつたらしきな

「ええ

確かに言いましたけど。

「そこで私は考えた、『皮膚通しての通信が遅いなら、脳に配線組んで直接やりとりさせれば良くな?』と。」

「わあいとてもマジドな考え方

てかそれ何かAC4系のAMSに似てないか?」この世界にもACシリーズ自体はあったし。

「ちなみに参考にした、というかぶっちゃけ丸パクリしたのはクラリッサから借りたこのゲームだ。まあ私にはゲームスピード(機体速度的な意味で)が速すぎて全然進められていないがな!」

「もしかしてゲーム下手?」

「うむひこ黙れ気にしてるんだ私も!」

似てるとかそういうレベルじゃなくて、まんまACFAでした。<sup>淑女</sup>とか。あんた何処へ行く気だよ。

「まあそういう訳で、君たちに処置を施す」

「別にいいですけど、具体的にはどんなことを?あと僕が了承した瞬間目がギラギラさせんの怖いのでやめて下さいホントマジ怖いんでお願いですから!」

まつざわこえんていすとつて怖いね。

「チツ仕方ない……内容としてはAM用の脳内回線を作るだけだ。あ、ついでに『越界の瞳』も付けるか?ボーデヴィッシュの瞳をメンテするついでだ」

「どうせ断つても『手が勝手に動いた』とか言ひてやるつもりでしょ……」

「当たり前だ」

いやそんな『キリッ』とかされても。

「と書つかメンテなんてできるんですか?」

「脳内回線を配線するときに、以前のタイプの『越界の瞳』だと一部邪魔になる箇所があるからな。」

いいのかそれ。もう一回『越界の瞳』を搭載し直すんでしょう?

「理論上は可能だからいいんだ。瞳の色は治せない上に、『越界の瞳』<sup>一ジエ</sup>が本来持っている機能を最大限使うこともできないが、少なくとも制御不能状態からは抜けられるだろう。ただし本当にそうなる

かは一切保証できないがな！」

「ダメじゃん」

本当にこんな人にリーダー任せて大丈夫か？  
ドイツ軍よく雇つたな。

「まあいい、とつとと始めるが。」

「いやちよつとまつて「問答無用だ」はい……」

結局無理矢理押し切られる形で麻酔をかけられ、僕は眠りに落ちた。

＝＝＝＝＝

手術が終わり、僕はベッドの上で目覚めた。

話を聞く限り、一人とも手術は成功。  
ラウラの『越界の瞳』<sup>ヴォーダン・オージュ</sup>も、一応機能回復はしたそうだ。

そして僕とラウラの首筋には、AMS接続用の端子が埋め込まれた。

手術前にも少し疑問に感じていたので、なんでもラウラにもAMS端子を付けたの、とあの人に聞いてみると、

「手が勝手に動いた」

とドヤ顔をしやがったので、とりあえず投げ飛ばすこととした。

まあ頭を色々いじられたのかも知れないけれど、僕もラウラも無事なので、まあいかないと妥協することにする。

専用機、楽しみだなあ。  
「ウラともちやんと戦いたいし。

## 第七話 越界の瞳とAMS（ドイツ軍変態研究者の本氣）（後書き）

「J意見・「J感想お待ちしています。

そして『彼』の原作介入フラグが立つた気がしないでもない。

## 第八話 ある日の訓練風景・その二(前書き)

お気に入り件数130件突破、累計PV40000超え&累計UV1  
ーク8000超えですって。

……まあ本業にあらがといひやれこます三(一一)三

## 第八話 ある日の訓練風景・その一

『誰だ』

「もしもしし、『僕』ですよ」

『ツ！貴様か、我がドイツ軍を

』

「僕に対して何て口の聞き方なんだい。一応、僕の方が立場が上なんだけどな？」

『クツ……。それで、今回はどうな音波用件で？』

「何、そんな大した事じゃないさ。君達、礼衣に強化手術、確かA  
MSと何とかの瞳だつけ?やつたんでしょ」

『行いましたが、それが何でしょ?』

「まさか、『それ以外』の事もやつてないよね?」

『ツー…………は、はい。やつておつません』

「ま、こじで嘘ついてもすぐ解るんだけどね。一応針を刺しこいつ  
と思って。  
観察対象折角預けてやっているんだ。僕の大親友を  
下手に傷つけんな事がアッターハ、許サナイデスヨ?」

『ヒツ、リ、了解しました!』

「それじゃあ、またいつか。

全く、道化も樂じゃないよ。まあ、観察対象親友の安全を守れ  
るなら、それでいいけど」

~~~~~

僕とラウラは、手術後の療養期間も終わったので、また訓練に復帰
していた。

AMSはまだ使う機会が無いので使っていないが、越界の瞳の調子は上々である。

……………といふか裸眼で一キロ先見えるとか、やっぱり凄い。

そして専用機については、あのよくわからん研究者が

「よつしゃ後は最終調整だけだぜええええええええええええ！」

と施設の屋上から叫んでいるのを前に見かけたので、多分もう少しなんだね。といふか今更だけどあの人頭大丈夫か？

さて、そんなことはさておき、今日も訓練の日である。

今回の内容は余り乗り気でないのだが、来てしまった物は仕方ない。その内容とは、

? ? ? ? ? ? ?『格闘戦』である。

＝＝＝＝＝＝＝

「今回のメインはトーナメント制にして、残りの待機中の隊員達は試合中の人たちを見て学習することにしましょう」

訓練を始める前、クラリッサさんがそう言つた。

まあ確かに、訓練方法としては妥当だろ。割と皆さん熟練の人たちだし、練習のしすぎで下手にけがをするよりも、集団行動の時に活かせるよひ他の隊員の動きを見てクセを把握しておいたほうがいいだろ。」

まあそんなこんなでトーナメント表が表示されたのだが、

「なんで僕だけ孤立してるんですか」

何と僕は決勝戦まで出番が無かつた。

「多分礼衣さんとまともな勝負ができるのはこの隊でも極少数でしょうし、なにより実戦でもないのに男性と戦うのはちょっと……みたいな人が多いので」

「なら仕方ないです」

確かに、ISが登場した今もIS無しだつたら男性が強いし、同じ隊とは言えとても親しい訳でもない男性に体を触られるのは嫌だろう。

そんな訳で、僕は出番が来るまで試合観戦をすることにする。

…………ラウラ以外誰も話掛けてくれなかつたのが、地味に悲しい。

＝＝＝＝＝

「やつと出番が來たぜヒヤツホウ！」

「何かテンションがおかしくなつてないか？」

おっとこれは失礼。

ラウラに指摘されたので、テンションを修正。対戦フィールドへ向かう。

ちなみにラウラは準決勝でクラリッサさんに負けた。まあ身長差利運用されて攻撃されてたから仕方ないね。

ということは、僕の対戦相手はクラリッサさんである。対戦ルールは簡単。『相手の背中を地面につけられたら勝ち』だ。

「では、両者準備して下さい」

そんな合図と共にフィールドとなつていて草むらに一人で向かい合つて立ち、開始のブザーが鳴るのを待つ。

その間に『ヴィーグル』を起動し、『条件反射』でブザーが鳴った瞬間に踏み込んで一撃を加えられるようにプログラム。

「礼衣さん」

「何でしおり?」

「あの……（男性との戦いは）初めてなので、優しくして下さいね？」

そこでその台詞を言うか。括弧内なかつたら意味が凄い変わつてくるんだけど。

多少心拍数が上がつたので、急いで修正。

丁度ブザーが鳴つてくれたので、僕はクラリッサさんに向かつて突つ込むこととした。

＝＝＝＝＝＝＝

「負けた……」

「まあ仕方ない、クラリッサ隊長は強いからな

結構粘つたつもりだが、結局負けてしまった。

クラリッサさん曰く、

「けいけんちが たりない！」

らしい。何故口調がRPG風のかは知らない。

というかあの人の超人的な動きは何だ。一瞬ビーム見えたんだけど。

……ま、世の中には知らない方がいいこともあるし、全力でスルー
するtoplしますか。

第八話 ある日の訓練風景・そのいち（後書き）

相変わらず短え。orz

「J意見・「J感想お待ちしています。

あと土日の少なくとも片方は更新できないかもです。

第九話 専用機（前書き）

昨日は投稿できずすみませんでしたorz
その代わり今日は文章量多めです。いろんな意味で。

第九話 専用機

…………

「…………」

「…………」

「…………」

「ほふ…………今日は平和だ。茶がつまい」

…………

あの日の朝、訓練に行くついで廊下のドアを開けないと。

「待たせたなー。」

「…………」

「バタン。

「じつしたしゃべ、遅れるべ?」

「こや、ひよりとな…………」

言えない。『ドアを開けたら田の前にサングラスとマントを羽織った変態がいた』なんて、幻覚のはずだ……。

「…………まあいい、行くぞ」

ラウラが不思議そうな顔をしながら、ドアを開ける。

ガチャ。

「やらないか

「…………」

バタン。

どうやらラウラにもアレが見えたらしい。無言ながらも全力で目線を逸らしながら扉を閉めていた。

「なあ

「何?」

「今見たものを全力でスルーしたいのだが、何かいい案はないか?」

「正直僕もそうしたいけど、案がない

「ならこの私が提案してやるつか?」

おおそれは助かるって。

「どうから入ってきたんですか貴女」

「気がついたら知らないうちに部屋に侵入された。」

「勘だ」

「まつざわさんで凄いね。」

「後私の名前をいい加減覚えてくれ、寂しくて泣くぞ?」

絶対嘘でしょ。まあいけど。

「解りましたよ…………ヘルマさん」

「よひしー」

僕とラウラの目の前にいるサングラスの変態、ぶっちゃけ前に僕らを手術したこの女性の名前は『ヘルマ・ハルフォーフ』。早い話がクラリッサ変て……隊長の母親である。

ただでさえ『変態』のクラリッサさん相手に話していくも疲れるのに、その母親である『変態の中の変態』ヘルマさん相手だと最悪こちらが死ぬ。主に精神的に。

そのため、あまり長く話したくはないのだが。

丁度よく、ラウラが用件を聞く。

「で、ヘルマ。用件は何だ。まさか暇潰しはあるまい?」

「そのままだ

えー。

「嘘だ

「なあ、こいつ殴つていいか?いいよな?」

ラウラが額に青筋を浮かべる。
まあさすがに殴るのはまずい、というかこのままだと話が進まないので、用件を聞き直す。

「まあまあラウラ落ち着いて。で、本当の用件は何ですか?」

「仕方ない本題に戻るか。簡単に言つただな……

お前らの専用機ができた

「おおー」「おおー

何かこの事実を聞くことでも時間が掛かった気がしないでもない。

＝＝＝＝＝

「よし、フォーマットとファイットイングは完了したな

あの後僕とラウラはヘルマさんに連れられ、渡されたISを装着した。

ちなみに僕が渡されたのは『シュヴァルツェア・ヴォルフ』という名前の機体。

全体のカラーリングとしては黒地に青のラインが走つてあり、背部には中心の大きなスラスターと4つのウイングスラスター、非固定浮遊部には羽っぽい形の実弾シールドが付いている。体を委ねるところには当然AMS端子。

主武器は大型プラズマ手刀『ゲファーレン』と遠・近全距離対応双発型プラズマライフル『ナフトフォーゲル』、そして16本のワイヤーブレード、ついでにAIC。

何でワイヤーブレードがこんなに多いのかヘルマさんに聞いてみたところ、

『大丈夫だ、お前にAMS接続したらやれるっぽいぞ』

『ぽい』ってなんだ『ぽい』って。

あと、『思考加速』が出来るように、生体補助機能も切つたらしい。

……アレって確かISのシステムの根幹辺りにあるんじゃなかつたつけ、どうやつたんだろう？

まあいいんだけど。の人なら何やつてもおかしくないし。

ラウラの機体は原作通り『シュヴァルツェア・レーゲン』だが、ワイヤーブレードが上記と同様の理由で10本に増え、プラズマ手刀が大型の『ブルーム』になつていて、レールガンがレールガトリングガン『5・8・1』になっている。エネルギー効率の方は一応大丈夫らしいが、ガトリングガンの制御にはAMSが無いときつ

いらっしゃい。

以上簡単な機体説明終了。

今回はフィットティングついでコラウラとの再戦もやるつもりだ。
ヘルマさんも、

「お前ら戦つんだろ？ 適当にやつてみる。私としても機体の出来を見たい」

と言つてくれたので、今日は最後までやれるっぽい。

やつたねたえ　『おいやめり』また思考読まれた……だと……？

＝＝＝＝＝＝＝＝

一人でIIS訓練用の戦闘アリーナ上に静止。

待機中、『条件反射』のプログラムついでコラウラに話掛けることにする。

『ねえコラウラ』

『何だ』

『機体の調子どう?』

『上々だ。そちがこそ大丈夫か?』

『いっちはん万全だよ』

『そりいえば、何で個人間秘匿通信で通話している?』

『試してみたかっただけ』

『……そつか』

ため息つかれた。まあ仕方ないか、僕もやりたかっただけだし。

「そろそろ始めるだ。30秒前」

ヘルマさんの声でカウントダウンが始まる。

それと同時に『条件反射』の項目の最終調整を始める。試合開始と同時に『ナットフォーゲル』をホール、一気に距離を離しながら遠距離モードで狙撃できるようセッティング……完了。

試合開始まで残り10秒。

『じゃあ始める?』

『そうだな』

5 - 4 - 3 - 2 - 1 0

「「あのときの続きを」「

試合、開始。

ラウラが『5 - 8 - 1 -』を構えて撃つてくるが、初撃だけはあつ

たたものゝ急いで後ろに下がることで残りは回避。

十分距離を取つたら『ナフトフォーゲル』を遠距離モードにてセッタ
し、狙撃？？？？？ヒット。

追撃はせずに、大きく左へ移動。

ラウラが『5・8・1』で応戦してきたが、これなら回避できる
と予想。
しかし、

「予想以上に弾速が速いね……」

「ああ、私も驚いた」

いくらガトリングガンとはいっても、レールガンである。

普通のガトリングガンとは比べものにならないほど弾速が早い上、
一撃の威力も高く、射程も長い。

仕方ないので『ナフトフォーゲル』を連射モードにしながら発射、

ラウラに急速接近

『5・8・1』での攻撃を受けるが、思考加速で体感時間を延長、
回避できるだけ回避し、残りはシールドで防御。
それ違ひざまにワイヤーブレードで攻撃を仕掛けた後、一気に離脱
する。

ラウラも負けじとスラスターの出力を上げ、一気に接近してきた。
急いでワイヤーブレードを4つほど出し攻撃を加えようとするが、
ラウラもワイヤーブレードで応戦。全て防がれる。

「その程度か？レイ」

「んー、じゃあこれならどう?」

ワイヤーブレードを16本全て射出。そのうち6本をラウラの後ろに回り込ませる。

ラウラも応戦しようとするが、ワイヤーブレードの本数が足りないため、一部を『ブルーム』で応戦。するが、対応しきれずだんだんと僕の方に近づいてくる。

ラウラの距離が十分近づいた瞬間、AICOを発動。ラウラの動きを縛る。

「なつ……聞いていたがこれほどまでとせ……」

「やつぱり全然動けない?」

「ああ」

やつぱりつよいねAICO。

とはいえるラウラの動きを縛ることが出来たので、そのまま『ナフトフォーゲル』を近距離モードにセッティング、発砲。

ラウラのシールドエネルギーを5分の4程削り、このまま勝てるかなーとか思ったその瞬間、

「あれ、動けない」

「当たり前だ、私が掛けたのだからな」

ラウラにAICOを掛けられた。

そして僕が一瞬集中を切らした瞬間、ラウラは『5・8・1・』を構え発砲。

こちらのシールドエネルギーを大きく削っていく。

何とかしてワイヤーブレードを射出、攻撃し、シールドエネルギーが0になる前にA-H-Cから抜けられた。

埒があかないでの『ゲファーレン』をホール、そのままリウラの懷へ突っ込む。

「くつー!?

「これで、決める? ? ? ? !

ラウラが急いで『ブルーム』を開いたのが見えた瞬間、

世界が、白く変わった?????????????????

===== Worldshift

「…………あれ?」

「…………何処だ?」

戦闘中だったはずの僕とラウラは、何故かよくわからない白い空間にいた。

しかし、全てが白い訳ではなく、所々に本が散らばっている。

「この本は何だ?」

「何だらうね？見当が付かない」

まあ立ち止まつていってもどうしようもないの、一人で本を取つてみると。

「これ、ラウラの名前が書いてある」

「これはレイの名前が書いてあるな」

二人で互いのぱらぱら捲つてみると、その中にはそれぞれの相手が過ごした今までの人生が書かれていた。

ラウラの人生は、実験施設で生まれて兵士としての教育しか受けなかつた人生。

僕の人生は、学校で人を*し、その後この世界に来た人生。

「ねえラウラ」

「何だ」

「ここに書いてある」とは本当?「

「そりだが、それはレイもなのかな?」

「????うん、そうだけ?」

＝＝＝＝＝ side shift・ラウラ

レイの人生は酷い物だった。

守りたかった物を守れず、最終手段として殺しを働いた。
そして死ぬ間際、守りたかった物に裏切られ、絶望の中殺されこの世界に流されて来た。

今まで誰も気がついてやれなかつたレイのそんな暗い感情。

もしかしたら、私は少しおかしいのかもしれない。

だって、レイの心のどす黒い闇を見てしまったにも関わらず彼を受け入れようと思えるほどに、彼を好きになっていたのだから。

始まりは助けて貰つたときから。

そして私の生い立ちの事を話したときも、レイは特に何も言わず受け入れた。

私の訓練中にはいつもサポートしてくれたのもレイである。

だから、レイが

「どう思つた？僕の人生」

と言つた時も、

「特に気にしないぞ？レイはレイだからな

と答えられた。

彼の心を、少しでも軽くするために。

```
====break shift
```

「特に気にしないぞ？レイはレイだからな

そう言われたとき、僕はとても驚いた。

てっきり、こんな肩みたいな人生を送ってきた僕を軽蔑するかと思つていたからだ。

そんな一言で大げさなんて思つかもしれないけれど、僕としてはとても嬉しかった。

そして、好きになってしまった。

こんな僕を受け入れてくれたラウラを。

```
===== inner psychological  
word : end
```

試合終了を告げるブザーの音で、僕らは元の世界に戻つた。

結果はラウラの勝ち。
ギリギリで『ブルーム』が当たる方が早かつたらしい。

戦闘後はそのまま宿舎に帰り、その日は休むこととした。

「あーあ、負けた」

「私もギリギリだつたけどな」

「それでも、負けは負けでしょ。あ、ラウラが勝つたんだし、何か一つぐらいだつたらお願ひ聞くよ?」

「なんでもいいのか？まずそんな約束はしてないが」

いや、僕の出来る範囲だつたらいいかなー、なんて思つて

「そ、うか、な、ら、?、?、?、?、?、?、?、?」

八九、立儀に抱抱いわ

一
好きだ

急に畠田をつとめた。
だけど、

第九話 専用機（後書き）

相変わらずの急展開＆駄文クオリティ。
あまり成長しない作者をお許し下さい。
しかも次からかなり時間飛びそうです。具体的には中二のモンドグ
ロッソ辺りまで。

……モンドグロッソって夏開催でしたっけ？あれ？

感想お待ちします。

補足：礼衣とラウラが飛ばされた白い空間について
一応は IIS の特殊相互意識干渉により形成された世界と言つ設定で
す。

「『相互意識干渉』なんだから一人の意識によつて構成のされ方つ
て変わるんじやね？」みたいに思つたのでこつしました。

第十話 再会（前書き）

安定の急展開。
そして短い。

第十話 再会

「姉さん」

『何だ』

「「」めん、急用が入つて決勝見に行けないかも」

『学校の用事か?』

「うん、同好会の用事があつて。次は絶対見るから、本当に「」めん

『解つた。次は絶対に来いよ』

「うん、じゃあまたね」

という訳で、今年は決勝を見に行く羽目になった。
やはり誘拐のイベントは不可避なのだろうか。

……何か対策を練らなければ。

~~~~~

さて、14歳の冬である。

……え、何か時期が飛んでないかって？気のせいだ。

とこりかラウラが隊長になつて僕が隊長補佐になつた以外は大きなイベントが無いんだよな……あ、ラウラとは恋仲になつたけど、キスとかしようすると他の隊員にその都度見つけられるせいであまりそつち系の関係は進展していない。クラリッサさん爆発しろ。

まあそんなことがあって、今僕とラウラは『第一回モンテ・グロッシの視察』といふ名前で日本にいる。

出発するときにクラリッサさん始め他の隊員から

「和菓子買つとき」

「ラノベ欲しい」

「同人誌いいいいいい——！」

などいろいろ言われたが、面倒なので全スルー。  
他にはヘルマさんから、

「『ハセお前らこいつって来るんだろ？爆発しろ』

とありがとうございましたお言葉をいただいたので、お礼としてラウラと一緒に空に向ひつかつ飛ばしてあげた。

…………さて、なぜ僕がこんな現実逃避をしているかと云ふ。

「やあやあ久しぶりじゃないか。15年とかそのぐらいかな？」

モンド・グロッソの会場へ電車で移動中、僕らの田の前に突如『彼』が現れたからである。

全く状況が読めない。というか前もこんな流れあつた気がするぞおい。

ちなみにラウラは僕の肩に頭を預けながら寝てゐる。かわいい。まあラウラの可愛さで現実逃避していくもどうしようもないのでは、仕方なく話し掛ける事にする。

「こきなり出てきて来ないでくれないかな、\*\*。驚くじゃないか、まさか君も転生してるなんて」

「その割には落ち着いている様に見えるのは僕の気のせいかい？後の世界での僕の名前は織斑一夏だから、前世の名前では呼ばないでほしい。紛らわしいからね」

これでも十分驚いているんつもりだけど。  
つて、

「織斑一夏つて、まさか」

「そのまさかさ、どうやら僕はこの世界の主人公らしい。全く、困った物だよ」

「君は人間観察が趣味なんだろう？むしろ主人公なんておいしい立ち位置、普通は喜ぶんじゃない？」

「その代わりに面倒が多すぎるんだよ、今回のことみたいにね」

ああ、そういうえば『彼』は面倒事が嫌いなんだつた。

前世でも僕をさんざんパシってたし。

あー、嫌な予感しかしない。『彼』がこんな雰囲気の時は、絶対に何か僕に頼むつもりだ。

「どうせまた面倒事の解決を僕にさせるとんでしょう？」

「当たり前。で、内容は

僕の護衛、ついでに誘拐犯の殲滅だ

## 第十話 再会（後書き）

『彼』、介入。

あ、明日は人物&IS紹介のみ上げます。

Jubeatでマチラン選択しまくる作業があるので。

……ダメ人間とか言わないでorz

## 人物&IS設定 v0・15（前書き）

人物&IS設定上げました。

多分これからも追記されます。

訳わからなくなつたときにでもどうぞ。

12／3追記

あ、バージョン表記変わつたら追記されてますので。

## 人物紹介

御刻 礼衣(ミトキ レイ)

性別：男

身長：173cmぐらい

転生者かつ主人公。チート能力は『ヴィーグル』。

髪の色は濃い灰色、眼の色は茶色。

『シユヴァルツェ・ハーゼ』隊長補佐（名目上はラウラの専属機体整備担当兼アドバイザー）。

前世で通っていた学校で殺人事件を起こし、その後殺されてからISの世界に来た。

上記の事件の影響で精神的に不安定な面もあり、多少感情の流れが乏しい。

ラウラに自分の事を理解し、理解してもらつてからはラウラと恋仲に。

『彼』とは前世からの友人。

ラウラ・ボーデヴィッヒ

性別：女

身長：148cm

ヒロイン。チート能力は無し。

原作との相違点は、

・13～14歳の時点で既に実力をつけ、『シユヴァルツェ・ハーゼ』の隊長に

・礼衣と恋仲

・越界の瞳の機能が一部回復

等。

織斑 一夏（＝『彼』）

性別：男

身長：178cm

転生者。チート能力は有るのかどうかすら不明。  
何百回と転生した影響で、暇を持て余し、人間観察を趣味とし始める。

前世で礼衣に興味を持ち始め、礼衣が転生したことで更に興味を持つことになる。

前世での事件の一因はコイツ。

それに多少は責任を感じているせいいかは解らないが、転生後のこの世界では礼衣を裏でいろいろサポートしている。

ヘルマ・ハルフォーフ

性別：女

身長：165cm

変態。ついでに研究者。

クラリッサ・ハルフォーフの母親であることからも解るように、かなりの変態である。

しかし裏では、ラウラが以前に比べ態度が柔らかくなつた事を純粋に喜んだりするような一面も。でもやっぱり変態。と言つて裏設定なだけなのであんまり本編には関係しない。

礼衣たちの専用機を魔改造したのはコイツ。

## シユヴァルツェア・ヴォルフ

御刻 礼衣の専用機。他のシユヴァルツェアシリーズと同様に黒をベースとしたカラーーリングになっており、所々に青いラインが走っている。

ウイングスラスターを多数搭載しており、これにより時速1500km/hオーバーの超高速機動が（一応）可能。

非固定浮遊部位には羽の形を模した実弾シールドがついている。操作方法にドイツ軍独自開発のAMSを使用しているため、御刻礼衣以外の人間が乗ろうとしてもAMS関連で拒絶反応が起きる。さらに、御刻 礼衣の『ヴィーグル』の能力と一部干渉したためにISの本来の機能である生体補助機能を撤廃。これとAMSの影響で、御刻 礼衣以外が乗ることはほぼ不可能に近い。

## オリ武装情報

遠<sup>ト</sup>近全距離対応双発型プラズマライフル『ナフトフォーゲル』モード切り替えにより、遠<sup>ト</sup>近全距離へ対応できるようにしたプラズマライフル。

なぜ双発型なのかと言うと、ヘルマ・ハルフォーフが「そっちの方がかっこいいじゃん」と指示したため。

## 大型プラズマ手刀『ゲファーーレン』

プラズマ手刀の大型版。なぜ大きくなったかというと、ヘルマ・ハルフォーフが以下略。

## シユヴァルツェア・レーゲン

ラウラの専用機。

外観には大きな変更は無いが、主な操作方法がAMSに変更されている。

#### オリ武装情報

レールガトリングガン『5・8・1』

「レールガンをガトリングにしたら強いんじゃね?」といつヘルマ・ハルフォーフの思いつきの元作成。

威力・弾速・射程・集弾性能共に申し分ないが、AMSによる制御が必須。

大型プラズマ手刀『ブルーム』

プラズマ手刀の大型版。なぜ大きくなつたかというと、ヘルマ以下略。

『ゲファーレン』と違い、手刀の大きさが調整可能。

#### シユヴァルツェア・ツヴァイク

クラリッサの専用機。

外観は大体レーゲンと同じだが、多少外観がぶつとい。

#### オリ武装情報

連射型プラズマカノン『エコード』

『プラズマカノンを連射式にしたら強いんじゃね?』といつヘルマ・ハルフ(ry)

一発辺りの威力は低めだが、連射速度が地味に速い。

A M S 制御必須。

大型プラズマブレード『プルート』

ついにブレード化。

と言うか外観がまんま A C f a の MOONLIGHT。

犯人は言わずもがな。

## 人物&HS設定 v0・15（後書き）

礼衣・ラウラの両HSに関して言えること。

だいたいヘルマのせい。

あと武器名はBEEMANの楽曲名を参考にしていたり。

## 第十一話 護衛//シ・ショ・ン・1（前書き）

いつも、昨日jubbeatに1000円ほど貰いだにも関わらず欲しかった曲を手に入れられなかつた偽桜です。

アクセス数見てみたら50000PV突破してました。ありがとうございます。

10万PV突破したら何かやるべきだろつか……。

## 第十一話 護衛ミッション・1

さて、『彼』こと一夏に護衛を頼まれた訳である。

一応軍の方に確認を取つた所、

『お願いだから受けといてくれ。いやマジで』

と何故かお偉いさんからも泣きつかれたので、結局受けることになった。

「……ねえ」

「何だい？」

「もしかして、うちの軍督していたりする？」

「さあ？ 見に覚えがないな」

この反応は多分、いや絶対にHEIWA的なSETTOKUした  
な。

口笛吹くとか怪しそう。

まあ僕としても前世の友人（笑）と話したいので、別にいいんだけど。

「で、護衛の具体的な内容は？」

「少なくとも決勝戦が終わるまでは僕の側に居て欲しい。多分誘拐犯の目的は姉さんの優勝阻止だろ？」「狙うとしたら多分そこまでだと思うんだ」

「りょーかい。要は近くに居ればいいんでしょ？」

「まあ簡単に言つとしだね」

その後も一夏と適切なことを話していたが、田舎の駅が近づいてきた。

流石にやるやくのドリカラを起すこともある。

「ラウラ、起きて」

「ふ……？」

「ウカウカはゆくこと田を開き、

「ふ……？」

変な声で鳴きながら抱きついてきた。

その姿が可愛すぎたのでつい反射的に抱き返す＆頭を撫でる。

撫でられて気持ち良わやうにラウラが「ニヤー」とか鳴いているのを見て、一夏は

「清々しいほどのバカッブルぶりだね、全く」

と呆れていた。

おいバカッブルとは何だバカッブルとは。これでもまだキスさえして無いんだぞ。

「それが本当に不思議だよ。興味深いけど、それよりもひとつと爆発しやがれこのリア充」

「思考読んだ？」

一応そいつら辺の訓練もしたんだけど。

「君のその緩みきつた顔を見て考へていることが解らないほど、僕は馬鹿じゃないよ」

ああ顔が緩んでいたのか。

「次からは気を付けるよ」

修正はしないけど。

「…………いや、修正しようぜ？」

＝＝＝＝＝ side shift：一夏

いくら言つても行動を開始しようとしないバカップル一人をSET TOKUし、会場まで引き摺つてきた。  
後ろで二人がガタガタ震える気がするけど気にしない。僕のSET TOOKUにKANDOUしただけだろ？

この口調飽きた。素に戻そう。

さて、今回僕を誘拐してくるであろう犯人は『亡国機業』とか言うらしい。中一つぽい名前でいいね。

それで僕を狙わないんだつたらもつと良かつたんだけど。  
それにしても、何で『亡国機業』とかいう団体（？）は僕を誘拐しようと考えたんだろう。姉さんの優勝阻止が目的ならもつとほかの方法もあるだろうし。

この世界の『原作』は礼衣から借りた分しか読んでないから、この辺りのことは全く解らない。

そこら辺が解つてればまだ楽なんだけど、無いものは仕方がない。  
まあ、ここは礼衣たちに頑張つてもらうしかないか……。

面倒だなあ。まあ全部押しつける事なんだけどね。

????????さて、一人にはそろそろ本氣出してもらわないと。

====break shift

一夏怖い。

そんな結論をラウラと一人で身をもつて体感した後、僕らは気がついたら会場にいた。

「そういえば」

「何? ラウラ

「あいつは誰だ?」

「ああ、まだ言つてなかつたつけ？彼は織斑一夏。去年のブリュンヒルデ『織斑千冬』の弟で、僕の前世の友人だよ」

「そりか……つて、はあ？」

を驚いてる驚いてる。

まあ無理もないか。いくら以前に僕の人生を見たとはいえ、いきなりこんなことを言われて『はいですか』と頷く人はいない。まあ、事実なんだから仕方がないんだけど。

＝＝＝＝＝ side shift? :??:?

「まだ誘拐できないのか」

『はい、ターゲットの周囲に情報にない人間が2人ほどおり、なかなか隙を突くことが出来ていません』

「嘘をつけ。ターゲットは一人で会場に向かつたのが確認された筈だぞ」

『嘘じやないんです！本当に得体の知れない2人が……』

「まあいい。とりあえず、何としてでも今日中に攫え。さもなければ、貴様らの命は無いぞ？」

『り、了解しました。直ちに任務を遂行します』

ビジ。

「…………全く。ここに来てイレギュラーだと？」

「今回、もしかしたら失敗するかもしねんな……」

## 第十一話 護衛//シシコン・1（後書き）

——で某ゲームのプレイ動画見ながらせつてたらじつはなった。

意見・感想お待ちしています。

## 第十一話 護衛リッシュション・2（前書き）

どうも、今度はボーダーブレイクに500円ほど貰いできた偽桜です。

期末前なのになにやつてんだかとか思つたら負け。  
後他の一次創作のラウラが可愛すぎて辛い。

勉強?なんだっけそれ?

## 第十一話 護衛ミッション・2

「ねえ礼衣

「なに?」

なでなぐ。

「君、僕の話を聞いてたよね?」

「うそ、聞いてたけど

なでなぐ。

「じゃあ、何で君達はそんなことをしているんだい? そろそろ苛ついてきたんだけど

「別に言われたことは守っているはずなんだけど。ねえラウラ

「うむ。むり向處に悪い所がある?」

「だから礼衣

お願ひだから観客席で自分の彼女を膝の上に乗せるのは止めてくれないかなあ！」

＝＝＝＝＝＝＝

うるさいなあもう。ラウラを愛でて何が悪いんだか。

そう思つて無視し続けてたら一夏の泣き真似がどんどんウザくなつていつたので、仕方なく僕はラウラを膝の上から下ろして決勝の試合を見ることにする。

因みに僕とラウラは他の試合も見たが、一夏の姉である織斑 千冬さんが他を圧倒していたこと以外は特に印象に残っていない。というか千冬さんの強さが圧倒的すぎる。

当然この試合でも圧倒的な強さを誇り、開始十分の今も千冬さんのIS『暮桜』はノーダメージである。相手はもう半分位しかないのに。

「やうじえばや」

「何だい？」

「君とあの入つて、ビッちか強いの？」

「全く、何を当然なことを。そんな事決まつているじゃあないか」

「ああやつぱり千冬さんの方が

」

「僕の方が強いよ」

「「え、」」

それって、今回のミッション僕達必要なかつたんじやね？  
そんな思いや純粹な驚きと共に、僕とラウラは固まつた。

「まあ何百回も転生してたら、自然と強くなるでしょ。まあ姉さん  
もこう着けて僕とほとんど同じくらいの強さだけど

それって、千冬さんの人外加減と一夏の非常識加減の、どっちに驚  
けば良いのかな……。

＝＝＝＝＝

結局、

さすがブリュンヒルデだわー（棒

とか思つてゐる間に試合は終了してしまつた。  
当然千冬さんの勝ちで。

そんな訳で一夏と僕達は、一夏の『ちょっと姉さんこないでこいつ』という一言で千冬さんに会つに行ひと表彰式を見ず観客席を出たのだが。

「なあ」

「何だい？」

「道は解つてゐるのか？迷つてゐる気がするのだが」

「ソソナコトナイトー」

「なあレイ、こいつ殴つてもいいか？いいよな？」

「まあまあラウラ落ち着いて」

なでなで。

「ふみゅつー？い、いきなり撫でるなああー！」

ラウラを撫でて落ち着かせ、一夏に問いかけ直す。

「で、どうせ迷つたんでしょ？」

「まあそれ以前に姉さんの居場所を知らないんだけどね。適当にそちら辺のスタッフにでも聞いてみようかな？」

多分聞けないと思つけどな……。だって、よく解らない男が突然『織斑 千冬に会わせる』とか言つたら不審極まりないだろうし。

そんな考えを知つてか知らずか、一夏が近くを通りかかつた男性スタッフに二口二口顔で声を掛ける。

何でいきなり猫被るんだよ……、いや別にいいんだけどさ。

「すいませーん」

「はい、何でしちゃうか」

「姉さんは何処にいるんでしょうが？」

「あ、それなら私が連れて行けますよ」

いいのかよ。

「ついでに僕の友人達を連れていくても良いですか？」

「いえ、セキュリティの関係上、ご友人の同行はちょっと……」

「そうですか……。で、もう一つ質問しても?」

「ええ、いいんですけど」

スタッフの人がそう言つた瞬間、一夏がいきなり猫を被るのをやめ、表情を嘲りのそれに変える。

「何で僕は『姉さん』としか言わなかつたのにい、すぐに何処かへ連れていこうとしたんでしようねえ？まるで、僕を連れていくのが目的みたいですけどお？」

「チツ　！」

元スタッフ・現誘拐犯が一夏に掴みかかるとするが、

「ゲボア！？」

「一夏、その口調ウザいからやめた方がいいと思つよ」

「まあ何となくやつただけだし。といつか、そんな世間話をしながらセコの不審者をかつ飛ばした君も大概だと思うけれど？」

「鍛えますから」

「うわー星がきもーい」

掴みかかる前に誘拐犯を蹴つ飛ばして無力化。一応依頼なので、しつかりと仕事はこなす。

…………こらラウラ。誘拐犯とはいえ一応人間なんだから、四肢を変な方向に曲げさせない。このあとのO H A N A S H I T A I M U にやることどが減るでしょうが。

ちよつと言つていることが矛盾している？気のせいさ。

さて、何か追つ手みたいな奴らも来たので、『ヴィーケル』を起動してラウラと一緒に対応を開始。

一夏は「さやーこわーい」と棒読みしながら突つ立つてゐる。

少しほは働こうよ一夏。

## 第十一話 護衛ミッション・2（後書き）

あれ、気がついたら一夏がネタキャラに……？  
今更か〇×

意見・感想お待ちしています。

第十一話 護衛//シ・ショノ・3（前書き）

いつも、武帝をやれりとして人の前に圧倒され諦めた偽桜です。

動け一夏。

## 第十二話 護衛ミッション・3

戦闘を行いややすくなるため、僕らはわざと袋小路へ移動した。

今回みたいに少人数で特定の何かを守るような戦闘の場合、開けたところで戦うよりもこっちで戦ったほうがいい……はず。敵の戦力は集中するけど、その分一点にまとまってくれるし。幸い後ろのほうには通気口のような出入りができるものもないのに、前方から迫つてくる追っ手のほうに意識を集中。

まずは先行して突っ込んできた3人の足にハンドガンで銃弾をプレゼント。

バランスを崩している間に接近し、両端の二人を手刀で黙らせながら、真ん中の奴の背中を蹴つて跳躍。飛んでる途中で後ろにいた4人に発砲

ヒット。

天井の照明にぶら下がり、勢いをつけてもう一度ジャンプ。一番後ろの敵集団へ突っ込んでいく。

着地ついでに一人を壁に叩きつけ、壁に手をついた反動で後ろへ移動、3人ほどを気絶させる。

ラウラのほうを見ると、向こうも二つの集団まで辿り着いたらしい。ナイフ無双パネエ。

「一夏は大丈夫?」

「暇だからと言つて後ろのほうでPFTMやつてるぞ」

「よし後で叩き潰そりつ」

そんな話をしながらもう3人ほど片づけ、周りが怯んだ隙にハンドガンを連射。敵をなぎ倒していく。

なんかスタッフっぽい人多いな。どんだけ管理が甘いんだか。

まあ他人様の管理の甘さで口出しできるほど僕は偉くもないのに、殲滅行動を継続。

さっきから「ば……化け物が!」とか「撤退だ!撤退する!」とかいつてる声が聞こえるけれども、

「ちょっとおまちなさいな」

「ヒッ!」

逃がす気はあんまりなかつたりする。

(組織的な意味で) オーバーキルは男のロマンでしょ、うん。

＝＝＝＝＝

3分後、周囲にはまともに動けるような敵がいなくなつたので、一夏のほうへ声をかけることにする。

「一夏、無事かい?」

「ちょっと待つてもう少しでこの曲クリアできそうだよ」「黙れ」「すみませんでした」

一夏が綺麗なジャンピング土下座をする。

そんなことやるんだつたら初めからこんなとこひいでの音ゲーなんてしなければいいのに。

「まあいいや、一応全員殲滅したよ」

「うん、多分実行部隊はここいらだけだらうし、後は念のため僕と一緒に行動するだけでいいよ」

「すげー面倒だから帰りたいんだけど」

「却下」

「うわー星がきもーー」

「君が先に言つたんだろ?」

「まあね」

「そんな事を話していると、敵数人とO HANASHIしてたらしくラウラがこっちに来た。」

「なにか情報聞き出せた?」

「いや、あいつらがただの下っ端だつたせいか、あまりいい情報は無かつた。聞き出せたのは、依頼を寄越した集団が『機業』、依頼人の名が『S』という事だけだ」

「いやいや、それで十分だよラウラさん。ありがと」

「一夏がラウラの頭を撫でようとするが、その前にラウラが一夏をかづ飛ばす。

「レイ以外が私を撫でるのは許さん」

……拗ねた顔でそんなことを言われたら撫でずにはいられない。  
死屍累々の中僕がラウラを撫でているシユールな光景は、結局一夏  
が復活するまで続いた。

＝＝＝＝＝ side shift? : ???

「おいでました、応答しろ！」

どこか暗い所で、誰かが叫んでいる。  
しかし返ってくるのはノイズ音だけ。

それは、送り出した部隊の全滅と、作戦の失敗を示していた。

「あれだけの数を送ったにも関わらず全滅とは…………

誰かがぼやく。

「 一体、何が起きた？」

## 第十一話 護衛//シシコン・3（後書き）

やつこちゃんのロイノビーハウスかな……。

一応簪はある予定なんですね。さび。

あとこのままだと簪の原作ログアウトフリゲが立っちゃいます。

……いつかアンケートちゃんと取ります。

意見・感想お待ちしています。

どうも、流石にテストが近づいてきて焦っている偽桜です。

## 第十四話 護衛ミッション・4

一夏復活後。

僕たちは、改めて千冬さんの所に行つたのだけれど。

「姉さん」

「一夏！」

この猫被つてるバカヒーラーはできないものでしょうか。  
何で出会つた瞬間僕とラウラ全スルーで抱き合つてるんだよ、うん。  
なんか見ているこっちが恥ずかしい（自分もさつき似たようなこ  
とをやつてたの自覚しない）

「さて、挨拶は程々にして」

「そうだな」

いきなり素に戻りやがった。

突つ込む気力もないでのスルー。

「そういうえば一夏、後ろにいるのはお前の友達か？」  
やつと僕らに意識が向いた。

「ああうん、彼らはバカップル兼僕の友人だよ

おいちよつと待て。

それどんな紹介だよ。

「ちょっと待て。私達はバカップルではないぞ」

「嘘ダツツツツー！」

「ひ、べりしネタは古いと思つぞ?」

「そつかい。といつか良く元ネタが解つたね。そっちの方が僕としては驚きだよ」

「副隊長に暗借りた」

「クラリッサああああああん！」

「で、お前達は一夏の友達なんだな。いつも一夏が世話になつている」

千冬さんが話を戻してくれた。ナイス。

「いえ、僕は今日久しぶりに会つただけですし、ラウラは一夏と初対面ですから」

「そつか、すまない。そついえば自己紹介がまだだったな。織斑千冬だ」

「御刻礼衣です」

「ラウラ・ボーテヴィイッヒだ」

「ラウラ。年上なんだから敬語使いなさい。」

べしつ。

「ふにつー?」

「敬語使おうね」

「わ、わかった……」

「別に私は気にしないぞ。むしろ面白とさえ感じる」

「その『面白』の結果何が起きるか解らないから怖いんじやないですか……。」

「せういえば、お前達さつき襲われたらしいな。大丈夫だったか?」

あ、やっぱり情報来てたか。  
まあ結構派手にやつたから、誰かに見られていても仕方がない。

「大丈夫、ただの誘拐未遂だから安心して姉さん」

「誘拐未遂はかなり大きい事件だろうが。心配したんだぞ」

「とにかく礼衣たちに全員排除してもらつたし」

「……お前も戦つたのか?」

「後ろでゲームしてた」

「馬鹿者」

「すみませんでしゃギャアアアア！」

一夏が青筋を浮かべた千冬さんに向かって飛ばされた。

……本当にここに千冬さんより強いのか？  
まあどうでもいいんだけど。

=====

一夏がどつか飛んで行ってしまったといひで、千冬さんが謝りてきた。

「すまないお前たち。つかの愚弟が迷惑をかけたな」

「いえいえ、一夏には昔お世話をになりましたから。気にしないでください。それよりも、今回僕達が関わったことを伏せておいてくれると嬉しいんですけど」

あまり用立たたくないからね。

「そんなことならお安い御用だ。今回は本当にすまなかつた」

「だから気にしなくていいですって。では僕たちそれで失礼します」

「ああ、ちょっと待て。失礼だとは思つが、一つ頼みたいことがある」

「いいですか、何でしょ」<sup>149</sup>。

僕がそう問い合わせると、千冬さんは一きなり頭を下げ、  
「一夏の接し方を見ている限り、あいつことって本当に『友達』と  
呼べる人間は、多分お前達だけだ。だから、これからも一夏をよろ  
しく頼む」

ああ、そういうこと。

確かに一夏、自分の興味対象じゃない人には上辺だけ優しくして心  
を開かない人間だからな……。

まあここのは無難に、

「お安い」用です

とでも答えておひつ。後々面倒だひつ。

「すまない、本当に感謝する」

「だから別に気にしなくて良いですって。では、そろそろ帰ります  
ね」

「ああ、またいつかな」

別れの挨拶をして、迷惑をかけなすことひとつと撤退。

……まあぶつちやけとつとと帰りたかっただけだつたりする。  
決して千冬さんの後ろに縛られてる一夏が見えた訳ではない。

……深く考えなこよひにじゆう。うん。

## 第十四話 護衛リリッシュョン・4（後書き）

明日が明後日辺りにアンケート取ります。

後來週はテスト期間のため多分毎日は投稿できません。  
頑張つて一日に一本ぐらいになります。

## 第十五話 あの日の訓練風景・その二（前書き）

いつも、期末前日なのに何やつてるのかわからない偽桜です。

千尋さんはアリソンじゃないよーどうなだけだよー。

## 第十五話 ある日の訓練風景・その二

（略）

礼衣達が去った後のお話。

「あの……姉さん」

「何だ」

「何故に僕は縛られているのでしょうか？」

「聞きたいことがある」

「それ縛る必要ない気がするんだけど」

「氣のせいだ」

「ええ……で、聞きたい事つて？」

「あいつ 確か礼衣だったか？ いつ、何処で知り合った？ 私の知  
る限り、全く覚えがないぞ」

「…………別に良いじゃない、そんなこと」

「ほら、どうしても言わないつもりか。なら……」

何で助けてくれなかつたんだよ、礼衣。

一夏の護衛をしてから、1週間後。

日本から帰ってきてからは、帰った直後僕らが同人誌を持つてこなかつた事に絶望したクラリッサさんが暴れ、ヘルマさんの『私のコレクション貸すから落ち着け』という一言で落ち着くまでに施設が滅茶苦茶になつた事件や、ラウラと一緒に寝るようになつた事以外は特に変化がない。

とこりかラウラとの関係も他の隊員の妨害でキス以上に進まない。クラリッサさんマジ消し飛べ。

そんなんある日の朝。

僕は何故かいつもより早く起きた。理由は知らん。

まあでも、いつもほぼ同時に起きているラウラの寝顔を堪能できるのでよしとする。

それにしても、

「うやうすう

……ラウラの寝顔が可愛い。

ちなみに今現在ラウラは僕に正面から抱きつく形で寝ている。流石に全裸ではなく下着（下のみ）とワイシャツ（提供・ハルフォーフ母娘）を着ているが、十分破壊力は高い。

そんなラウラを見ていたらちょっと衝動が押さえられなくなつてきたので、まずはラウラを抱き返す。

「うわあ

僕が抱き返した事に反応したのか、ラウラが身をよじる。

やばい、僕のナニがラウラの腹に当たつて反応し【以下自肅】。

しかもそんなタイミングで、

「ふあ

ラウラが起きてしまった。

となると、当然僕の「自肃」なナードが当たつてこむ」と口癖がつく  
わけで。

「れ、レイ……？」

「いやこれはしかたがないところかなんところかその」

ラウラが頬を真っ赤に染める。

そしてうまい言い訳ができない僕。

「…………ふにゅう」

結局、ラウラが恥ずかしさのあまり田を回して倒れてしまった。反省。

ああ、そういえば、

「…………残念、あと一歩でしたか」

「おこクラリッサ、声が大きいぞ」

「大丈夫ですよ母さん。」れぐらいならばれり「ばれてますよクラ  
リッサさん」あ、あら……」

「ほーら言わんじつちやない」

何て会話をしながらクローゼットの中に隠れていた不審な一人に〇  
HANASIするのは忘れないでおいた。

＝＝＝＝＝

朝食の間、ずっと頬が赤かつたラウラを落ち着かせ、何時ものように訓練に参加。一応この隊のリーダーはラウラだが、経験の多さからいつも訓練はクラリッサさん主導でやっている。

今回の内容は『ISの点検・整備・調整。非常時には自分でできるよう』、といふことらしい。

他の隊員達は隊所有の『ISの、僕とラウラとクラリッサさんは専用機の整備等をする予定だ。

ちなみにクラリッサさんの専用機は『シュヴァルツェア・ツヴァイク』。製作者は当然の『とくヘルマさんである。

AMS & AIC 搭載で、主武器は連射型プラズマカノン『エコーズ』と大型プラズマブレード『ブルート』、あと8本のワイヤーブレード。ヘルマさん曰く、『愛娘だから特に本氣出した』らしい。僕とラウラの機体もそうだが、これでよくエネルギーが持つな、とか思ってしまう。ラウラの『5・8・1』なんかかなりエネルギー食いそうなのに、どういう訳か全然減らないらしいし。

思考放棄。

まあそんな訳で、隊のみんなで『ISを整備室に運び、作業を開始する。

内部アクセス用のケーブルを『IS本体に繋ぎ、コンソールを起動。

早速スラスターの出力でもいじりつと思つたのだが。

「イヤアアアアアアアアホオオオオオオウ！」

何かヘルマさんが突つ込んできた。

「貴女普通の登場できなんですか……」

「無理だ」

「いですか。

「で、何かあつたんですか母さん」

クラリッサさんが会話を進める。

「いや、コソソールでは操作しにくいと想つてな。これを用意した僕とラウラとクラリッサさんに渡されたのは、何だかよくわからない端末。何故かAMS端子っぽいのもついている。

「AMS経由で直接ISの調整を可能にする端末だ。パネエぞ」

パネエて何だ、パネエて。

まあせつかく渡されたものなので使つてみる事にする。

ケーブルを端末に繋ぎ、端末を僕の首のあるAMS端子にセット。今度こそスラスターの調整を始める。

何處かの偉い人が「当たらなければどうってことはない」とか言っていた気がするので、単純に出力を上げようとしたんだけれど。

「え、なにこの『ジエネレータの出力が足りません』って文字」

「私にも出たぞ」

「私もです」

え、みんな速度上げようとしてたの？  
いやまあいいんだけど。

あとエラつてジエネレータみたいなもの積んでないよね、確か？  
まあどちらにせよ皆同じメッセージが出たのは変わらないので、開  
発者であるヘルマさんに田線を送ると。

「ああ、そう言えばACfaハマつた時にそんなものを積んだ気が  
するな……」

え、マジ？

これ積めばほとんどのエスのエネルギー関連の問題解決するよね？

そんな僕らの考えを安心させようとしたのかは知らないけれど、

「AMSないとろくに制御できんがな、処理能力的な意味で」

と補足された。

人の脳を高性能コンピュータがわりに使わないでください。いや本  
当。

まあそんなことがあつた以外は特に事故もなく、今日一日は平和に

過いせた。

……へいわつていいね。

＝＝＝＝＝

寝る前の一幕。

「うめ……」

「どうしたのラウラ」

「今日私空氣だったた……」

「大丈夫、僕はちゃんとラウラのこと見てたから

なでなで。

「なりいこ……」

「じやあ、おやすみ」

「こや  
」

バカッフルとか言つた。

## 第十五話 あの日の訓練風景・その二（後書き）

真ん中辺りかなりお粗末でも気にしない。

あと10万PV突破しました。ありがとうございます。

意見・感想お待ちします。

……あ、明日アンケート取ります。

## アンケート

いつも、睡眠薬とカブロイン剤を取り違えて飲んだ偽桜です。今日は昨日も予告したとおり、アンケートを取ります。

内容：一夏×?について

一夏のヒロインどうしましょ、と書いたことがあります。ぶっちゃけ全然考えてなかったので、どうしようか悩んでます。一応作者としては簪にでもしようかな、と。

選択肢としては、

- ・ 簪（野鳥獸さんが既に1票入れてくれました。感謝）
- ・ セシリリア
- ・ シャルロット
- ・ 篠
- ・ 鈴
- ・ その他（のほほんとか会長とかその辺り）
- とこう感じです。
- あ、あとジーツトエンジンターマス 様からの提案で
- ・ 一夏『が』ヒロイン（要是礼衣×ラウラ&一夏になる予定）

と言つ選択肢もあります。

アンケートの回答に関しては感想欄の方にお願いします。

期限は十分に回答が集まつたと作者が判断するまでです（この先原作突入までどのぐらいかかるか解らないので）。

今回のようにストーリー展開の一部を読者のアンケートに投げるほど発想が貧困な作者ですが、これからもよろしくお願いします&回答お願いします。

## 第十六話 ある日の訓練風景・そのせん（前書き）

いつも、期末試験がやっと半分終わって今日は休みの偽桜です。

文章グダグダでもしかたない

きまつだもの（明後日の方向向きながら）

## 第十六話 あの日の訓練風景・やのれん

…………

「あ、

「ふ、

「あ、

「…………え、」のパートナーまだあるの？」

メタ発言は禁止です。

「解ったよ…………。まあこいや、それなら適切に『アレ』のフラグでも立てますか」

…………

IJS整備訓練があった次の日、朝起きると。

「ん…………」

田の前にラウラの顔があった。

「うわっ！？」

「いやっ！？」

思わず驚いて飛び退いてしまった。そのせいでラウラもバランスを崩す。そのままベッドから落ちてしまいそうだったので急いでラウラを支える。

「大丈夫？」

「だ、大丈夫だ……それより、いきなり飛び起きるな。驚くだろう」

「起きたときにラウラの顔が間近にあったから、つい驚いて。何であんな所に？」

「たまたま私が先に起きてしまつて、あと……」

ちら、とクローゼットの方を見る。なるほど、今朝はハルフォーフ母娘が居なかつたのか。

「『』めんねラウラ

なでなで。

「むう……な、なら……」

ん、とラウラが唇を突き出したとき、その物音は聞こえた。

==== side shift : ハルフォーフ母娘

礼衣とラウラの部屋の天井裏で、蠢く影<sup>バカ</sup>が一つあった。その影<sup>バカ</sup>たち  
は、天井の穴からじつと中の部屋を見ている。

突如、その影<sup>バカ</sup>たちが小さな声を上げた。

「ああ惜しい。後もう一歩だったのだが」

「『いつ私達がいつもそこから出でると言った』作戦は成功です  
ね。後はこっそりここから覗き続ければ、いつか一人は……。そう  
いえば母さん、ちゃんと録画用のビデオカメラは用意してますか?」

「当然だ、ちゃんと！」 「ヘーソンナ」「トシテタンダ」何、行動  
が速すぎる！」

「マッタク、貴女タチハ何ヲヤツテイルンデスカ」

「あのですね礼衣さん、これには深い訳<sup>バカ</sup>」「問答、無用！」「ギャア  
アアアアア！」

……結局、二つの影<sup>バカ</sup>たちは礼衣にO'HANASIされた。

これで訓練の時には復活しているのだから驚きである。

===== break shift

さて、今は真冬である。

真ん中の冬と書いて真冬である。が、何故か僕らは軍施設の無駄に広くて深いプールにいる。しかも屋外の。

このプール何と広さは200 m四方、深さは5 mもある。半端ない。まあでもプールである以上今日は泳ぐんだろうが、なぜこんな真冬に水泳なのか。まあ確かに実戦ではそんなこと言つてられないけどさ。

気のせいか他の隊員も不満顔だ。

……おい誰だ今ぼそっと『今日は一〇一〇したかった』って言った奴。お兄さん怒らないから出てきなさい。

この隊にまともな女性は居ないのか……あ、ラウラがいた。

「礼衣さん、バカップル的思考はいい加減にして下さい」

「だが断る」

ラウラ可愛いし。

「で、副隊長。今日の訓練内容は?」

隊員A（名前知らない）が質問をする。  
何で名前を知らないのかって？だつて必要以上に他人の名前覚える  
気がしないし。ぶっちゃけ邪魔。

まあそんなことはいいとして、クラリッサさんが説明を始める。

「今日はですね、皆さんの予想通り着衣泳

L

ああやつぱりか、と思つた矢先、

「だと思つたか！」れだよー。」

何かプールの水中から変態と共に大量の水に浮かぶ足場が出てきた。どこにこんな物を隠すスペースがあつたんだろうか。

はい、ということでおはな『ドキッ！？女子だらけの

「ナ、ナンダッテー！」

何かいきなりよくわからない鬭いが始まりそうになっていた。後ク

まあ『女子だらけの』なら僕は除外だろうから、安心できる。

何書いてるんですか、礼衣さんもですね

.....

II  
II  
II  
II  
II  
II  
II

『これ訓練なの！？』とか『本当にヤリタカツタダケーじゃないですかねえ！？』とか非難が噴出したが、結局全員が渋々用意を開始した。

ちなみにルールは簡単。水の中に落ちたら負け。制限時間は十五分で、終了後生き残った人以外はヘルマさん特製『なんかパネエランニングマシン』を50分間やらされるらしい。殺す気か。

武器はゴム弾入りの銃器全般、刃を潰したナイフのみ使用可。IIS含めて今までに結構銃器は扱つたが、何だかんだで扱いやすい拳銃が僕には合っていたので迷わず拳銃を選択。

……うおいラウラ。いくらIISで使っているからってガトリングガン選ぶのは無謀でしょ。  
というかよくあつたなゴム弾ガトリングなんて。

「私が作った」

解りましたからヘルマさん、ドヤ顔はやめてください、ウザいから。「ではみなさん、それぞれ指定の位置に着いて下さい」

クラリッサさんの指示で、全員それぞれに割り振られた浮島に乗せられた。

ヘルマさんの号令でスタートらしいので、ヘルマさんが一定以上の声の大きさを出したら動けるように『ヴィーサル』で条件反射をセツト。

ヘルマさんが大声を出そつと息を吸い、

「では、スタート…………とでも言つて思つたか！」

「のわつ！？」

あ、やばい。

今の大声で体が反応してしまった。  
と思つたときにはもう遅く、

「あ――――！」

さばーん。

「レイ――――！」

プールに落下してしまったよ、うん。  
真冬の水って冷たいね。本当に。

……当然、その後僕は風邪を引いた。

いや、ラウラに看病して貰つたのは嬉しかつたけどさ。

## 第十六話 ある日の訓練風景・そのせん（後書き）

最後の方特に力抜いた

アンケート途中経過。

簪 6票

のほほん 2票

一夏がヒロイン 1票

シャルロット 1票

結構多く集まっています、ありがとうございます。

この調子でいけば今週末には締め切るかもしれません。

引き続き、アンケートの回答と意見・感想お待ちしております。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5945y/>

---

IS -隊長補佐の憂鬱-

2011年12月7日09時48分発行